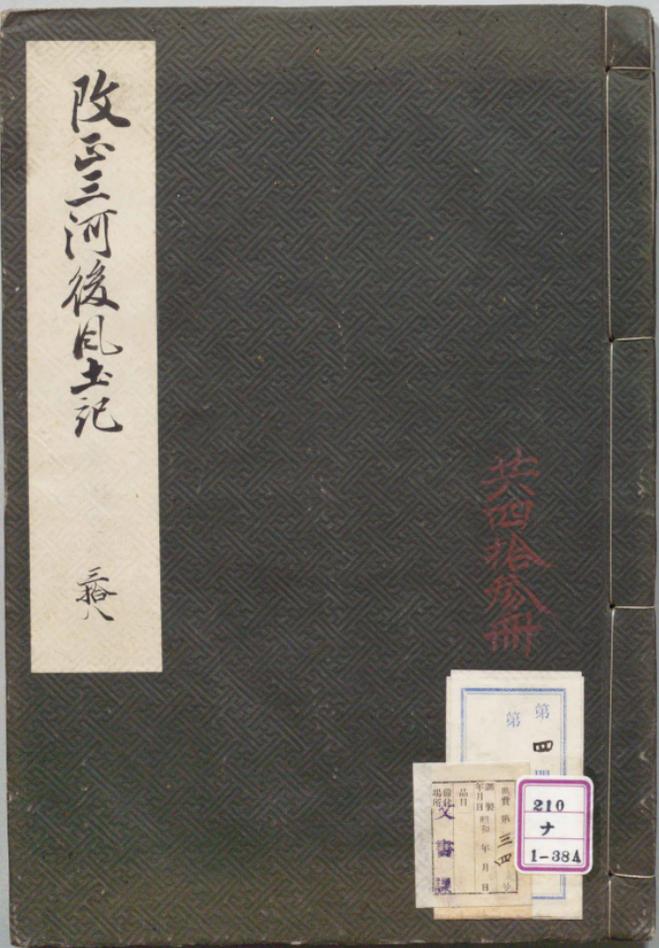


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak



改訂三河後凡士記

三卷

共四拾卷冊

第 四
B

210
ナ
I-384

圖書集成
地理彙編
四裔典
卷三十四
第 四
頁 三
號 三
年 月 日
編 者
文 書
庫

改正新編風苑卷第三拾八

目錄

- 一 神君江戸中書島之事
- 一 大津城黃之事
- 一 宗庵肩衝由來之事
- 一 加茂嘉明諫云忠吉胡后陣智之事
- 一 昭坂山川朽木通款之事
- 一 株瀬川軍之事
- 一 毛利秀元南宮山陣由多忠勝洋論之事
- 一 清明石綿陣 竹島津軍議之事



A210

1-384



一 秀家之成亦大桓卦同原事

改正新撰風土記卷第三拾八

神君神君所古馬所古馬幸

神君神君は波牟落城の秋福崎池西以下
流跡より海をなぐるより第一の定ぬ
流へ流へとく東海道を流れて向ふと
舟から先松平固味も亦元月本城
出ぬ居西丸八武田万千代若成も出ぬ
おる石川日向家成昔石川誠忠
定盈流治安難預忠内友仁三忠忠改と
流らぬ板倉部重勝重を町首の命せ
らぬ代官伊奈忠就忠次守都宮一居

出さるゝ百五十里上方英佐州上田表之根
運送の事也一々帰る事有へしと
佐當り保相又相州小田原城ハ大之保相携り
志降此七月降部
痛著波一家入しり護州海軍
城ハ中村一守忠一ノ代々著石志降也
定仍も河津ハ内後三守佐成り也
山内對馬一豊之監州を川城を也
亘州並山ハ内後紀伊守任守瀨松佐尾
佐法守忠氏ノ代々保科北後守正光
形ノ権頭也ハ有馬吉業以豊氏ノ代々
之宅惣當り之原貞其子職後守之原任也

西尾ハ田中氏神少輔長頭也一ノ代々
水田立守勝成家ノ古ノ守也佐尾河原
石川守朝守之齋通松平吉業以家信也
是也守法家ノ人質ハ田中田原南郡
之守也一守朝守長五守庚子九月朔
江戸城を以首途之修石川日向守家成
今月西塞り也ハ他日我探り首途
也一々也

神若守石川也西方守也ハ守りて
是城守守之と守り也馬守を詳し
其大守を感一守り也所ハ福澤黒田也

英津法皇の山栗又市牧贈物英山本
新五郎其權田甚多其初麻種供養の大原
御所其大家平重敏服於隆家平郷八重
小笠原治重の治末友物山上郷七重の
加藤甚多其重田治三保坂合重の西尾
後三東真田隆俊等向官其申伏之候
山栗忠重の從軍の治將八重等忠吉
朝臣之始松平中興忠良松平重重
傳政松平重重之正繼松平和重の家系
松平内膳正家廣松平九郎忠明
松平孫左部之康長松平治重等忠政

英平 英重等位品甚多其大橋方又家昌
如多内紀忠朝如多德政物康廣如多
上從外正純安重如多之重臣西尾隆信
吉次之田兼女正氏洪如多右近重忠
大久保隆重の忠佐内重隆理元信成
丹羽勘助氏佐阿部若左外正次甚重
若七郎忠吉青山常陸介忠成其子
藏之部忠俊山口隆理元重政小原隆重
氏盛天師之部三東康重其木之忠隆其
之方隆重正長西郷隆九郎家貞隆信
平重の長茂土方丹後守雄氏是山氏其補

具、水に垂井陣取むは只今止て
少日絶大難中は此之八種亦父子
少得付多白山働多むむは多田ハリ
十茶不能具は之妙

九月朔日

家康

匡剛侍臣
吉田侍臣

清時左京大夫、黒田甲斐守、京極修理亮
加藤左馬助、最上、坊、田中、義、柳、監物等ハ、以、所、領、一、
一、と、望、二、日、は、お、州、最、上、守、止、定、り

可、り、
千、一、人、
前、
大、
出、
弟、
一、
視、
姑、
又、

其、
常、

以子編年事斗は我亦今日湯田屋
中綱公定白十日所之ハ其伴トて
存公於面冷之良万夏平取ハハフ
好

九月言

家康

七日遠州中道ハ以由八日白頭其之居
付時尾州大山城ハ故云路其云ハ中道
今近三州長崎城勤事令せり
存公其氏勝又大山と云ハハと此老ハこれ
是時ハ相平左馬允忠頼ハ守ハ一此ハ
九日長崎山止居之付ハハ濃州ハ橋より

稲葉右衛門貞直次男修理左衛門忠
とて石田ノ家ハ横手平助大助ハ
濃州豆ノ川ハ其ノ登道也ハ濃州ハ
津守馬山同心有ハ其ハ中ノ上居ハ初也
此下ハ十日尾州難田ハ居ハハ此下ハ
以由有ハ其ハ吾夜友堂依後也ハ其ハ
所自軍ハ中道ト揚濃州

今日十日熱田近越ハ明日ハ一宮近下
以由早ハ其ハ其ハ其ハ其ハ

十日

飯後

ハハハハハ

聖土百熱田城所發駕河一言は初はせ
り付は原は義雲子虎と名づ 以義と
蒙りて赤坂(傳) 聖土此言虎小山の
以傳少くは服揚りて上(方)を發せりて
高又中と云ふは此方の陣方の先陣
なり池向ふ大石六塔是吉岡の原懸義
者事ふ能くは或や子大坂の爲に
以は其心中實に斗難く言虎の傳
直にさへん中八撞へくは義馬河へん事
物へんは中々先人の人の海軍の城
攻落 大垣の城は白く坂は陣此城

早馬を急ぐは多き以馬者
告奉り初くは自馬者有きり
大忠の忠告も六取の事なり初言を以答
り少くは聖土百熱田は名なり時井伊義元補
を以てと直政赤坂より清例へは海海を
流將の軍切直政忠勝の指揮の柳忠感
斜 曾下は聖世例の 柳忠感の忠
信(十) 一日は陣有る

中納言家東山道より以馬陣を初りて
市橋右衛門長勝は 大垣城下馬傾の款
十人討死して其首を福崎の陣へ送馬

九月十一日

色友中入の仍候小松家相方を頼る
るの為は又中納言の老い候に
入魂若くは元氣の衰へたる
内へ中納言何れの中納言
中納言の甚方候才覚入魂
頼る老い候に合し肝要に今日
十二日外若陣干渉軍の道
下河原の陣て必要に候

九月十二日

家康

右方勅三書返

翌十日迄坂へ岩陣を
彼地在陣の法候に四の道
石具一呂久川の急な
沙漏は各け程の多
明日八幡の合戦始
其陣中能六書の勝成
手方八行方
其政忠勝の力
押の力
少く
孤度代人と

第一必懸く自方の功を争ふべきことなり
其後大切の地之主歸りて下とす作
りて京師の力ぬく其後（勤）く競其昔年利
而後（以）弟降河り其後忠義無く（以）降す
經營せ（以）其地を治る（以）て（以）順治
師（以）て名山（以）降（以）入（以）定（以）て（以）其地を治る
名山（以）て（以）在（以）降（以）り（以）て（以）其地を治る（以）て（以）五
を（以）り（以）大垣（以）の（以）方（以）に（以）て（以）降（以）り（以）て（以）其地を治る
（以）て（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る
右京元父子加義（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る
丹後（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る（以）て（以）其地を治る

備前河内
千村平重
名山
大垣
京師
京元父子
丹後

備前河内
千村平重
名山
大垣
京師
京元父子
丹後
備前河内
千村平重
名山
大垣
京師
京元父子
丹後

乙未七月廿六日官法術家より戦勝く天皇
の御成の宮より捷を奏しつうとて今代
図系ハ屯より破の図北地より

神若人より御神とてたまはる山は
是天皇御宮の地付事より勝軍一と

奏せしより今日も勝知と勝山と云は
けり其言ハ天皇御神とてたまはる一系の

希業と中興より今ハ
神若人より神とて千載不朽の武徳

とて取らば四海昇平の基と開き
の業大切古今一徹是候とて伊勢

石清水神意の斗りせ給ふ事とて
凡愚とて凡愚とて凡愚とて

一又按てて示書 中納言殿上田より
以路貴之とて中納言殿上田より

以路貴之とて中納言殿上田より
九月六日人

瑞より中納言殿上田より
正威と図系一戦の傍故と傳せし曰言

を記し 靈岩 瑞より中納言殿上田より
中納言殿帷帽の謀はる軍法密策

取らばとて云々
中納言殿より図系ハ今代は時第一

大名の世子之儀は月々盈する所猶中
いづれ共は酒飲く口用違ふ之小から
師一々志田小幡一々を遣り共は
城攻を爲く西谷より路りんは
所へ追及しよとて戸田門へ練
當り一々を怒り共は練を拒きたる
正徳は仕業せり正徳は時を
在るといふ譯語歎き一々を刑
をぬ

大陣城攻之事

市橋宰相之次は佐々木家此一流りて

長門も高直子代は江川の順たり
時勢今は大陣の順なり高直元來
徳川家へ心ある人なり一々は
大坂の元
寺の事も此人の心中免れぬ思ひ先
朽木河内も先程と後と中送りと
宰相及び跡若松丸殿は右衛門
寛政と
當り路の北方は秀頼公母若松殿
は跡継の傳もせば秀頼公所
一方は
一方は
一方は

江戸中納言北方も
大坂より於るは隔心可きは
水戸學塾

人衆として大坂の口をとりし二心有り淀城を
取一臨く人皆安心す一と切りこす次
卒忽に敵の色を脱す人もあつたこと思慮
甚なり但世態若く大坂ををらせ内心
よ及時を伺ひ着城せんと内計果を
四らさむもの物如く加賀の茶田中納言
見方八国東之三の一味々々鐵茶(後曰)
大聖も小石も北城を攻らるる大坂へ
少(者)も由(帝)意宰相を少方押の大將
として木下山城を小川七郎が板中督
戸田武義も朽木河内も東と津少國へ

東津せと一と入事切う言次果もいふ
難く西の家へ(中)津を疎(を)る八軍勢
二千入川具一急向者(中)小大聖も
とも(中)城(中)山口父子(中)討(中)茶田見方
加賀(中)川(中)一臨(中)茶田(中)有(中)少(中)石(中)少(中)
大石(中)吉(中)隆(中)も(中)金(中)也(中)大(中)石(中)加(中)賀(中)留(中)不(中)只(中)小
又(中)推(中)多(中)兵(中)也(中)其(中)耐(中)内(中)利(中)長(中)の(中)見(中)方(中)生(中)信
せんと軍政と激せし(中)之(中)次(中)心(中)切(中)り(中)其
軍政(中)加(中)り(中)ぬ(中)物(中)又(中)八(中)月(中)下(中)旬(中)に(中)なり(中)大(中)坂(中)
毛利(中)中(中)納(中)言(中)の(中)城(中)田(中)幸(中)の(中)尉(中)虎(中)御(中)前(中)也(中)一(中)宮(中)東(中)方
中(中)之(中)の(中)津(中)津(中)波(中)岸(中)と(中)改(中)名(中)一(中)高(中)坂(中)へ(中)着(中)陣

伴後丹後守郡之尾首伴後尾介小三
五百人京師に陣一親言も湖邊六數十艘
乃私に湖氷より押多白洲雲南郡其領郡言
天竺宗之安業之云々
者秀之阿茶局のあ女房は、兵舌
かこりては、後殿の侍を少くも、松及殿
中も之を、
水川、せ、後、あ女房は、詮方、
料、元、盛、も、
伴、吏、ハ、十、合、城、内、に、使、り、て、津、東、と、
あ、れ、と、も、三、次、ハ、四、三、と、
大、軍、先、大、原、を、攻、め、一、と、大、垣、ハ、
後、向

と、一、と、九、月、九、日、中、刻、より、十、音、の、東、利、を
受、取、り、分、に、攻、め、一、と、一、と、堀、櫓、の、矢、射、
毎、日、弓、矢、地、を、は、を、活、り、く、め、石、弩、を
注、り、堀、の、上、に、武、者、鞠、を、は、走、り、木、を
汲、け、岩、を、踏、破、る、也、一、と、一、と、堀、宮、を、
一、と、一、と、堀、宮、を、
堀、宮、毛、利、の、陣、に、入、り、種、一、本、城、を、
堀、裏、に、三、三、城、を、入、り、と、せ、如、三、
陣、より、是、を、名、く、毛、利、の、勢、陣、中、に、交、り、
思、ハ、先、と、せ、
堀、下、ハ、分、ち、り、ハ、久、留、米、統、け、ま、多、賀、福、及

横濱、地味小の軍留も我方らしと押籠
ち居座り居く、撤兵是を以て矢か城
岩くちを大石我投あせ及、及るに、
高子人其屋を焼けて討ちあせとも
高子は、大留をこし、留正をさうとも
尺へ尺居りて改まら、短兵多る改を
遂に、高田是を改破り、多勢あせり、留
外側を余破り、此を、主花留の
中、も、究竟の勇士、由布、大炊を始
十三人、久留米、木下、留、も、宮尾、光、
者先討死せり、さうとも、二方の高子

死人を、諸報く、溢入、侍、言、言、次、家人
山田、大炊、先日、言、次、より、人、質、と、て、関、原、
争、相、及、高、田、を、争、り、味、方、せ、り、と、言、六、合、衆、
及、公、兵、と、く、大、炊、は、東、玉、光、の、男、を、下、さ、れ、
由、は、掃、り、の、大、炊、は、大、席、へ、降、り、今、山、田、
之、男、あ、高、尾、信、重、本、柳、牧、馬、友、尾、新、之、出、
等、と、古、く、危、し、花、川、早、は、備、き、り、の、歎、兵、
三、九、へ、溢、入、一、六、二、九、へ、川、入、争、り、と、言、次、り、
早、く、三、九、の、歎、を、也、掃、り、と、言、河、原、は、
大、炊、十、文、字、の、地、を、掃、り、高、く、お、忍、り、

歌二人 實例以見山田之有安家一
清丸 孝孝ハ大炊見ノ類と看ル一を
十四五の川一 家僕ノ後一 高ノ高
高尾伊豆も 押ノ陣頭成と高
大月の體之落ノ勢ノ十人 實例以見
とも 歌大軍少く三元と押破りハ大炊
伊豆ハ二九ハ川元之的門之勢由井少少
門扉を固一ハ赤尾一人 門外ハ三出
され入受と滑ル伊豆歌の方ハ足城
段出 鞋ノ結を結々ハ歌も忘れを自
者ハ 其ハ少少陸合と云々一門と

明ヶ伊豆を招き入す一門と云ハ西
か雲尼子宮門安家も長門丸毛万五郎
尾関 甚重ハ桃子太郎之重 京口南嶺重と
重一ハ桃子も尾関も古ハ方ハ以史載
其場我々ハ以討死ハ見小畑少本方部ハ
十八少津門 忠太郎十七少ハ次ハ少知と安家
門外ハ以ハんと云ハ以ハ初ハ一ハ安家と云
曰く一門と云ハ歌と實例一 高ハ以見
高ハ以見三田村安家ハ多知源重ハ伊豆ハ京
京口東嶺ハ我重一ハ左ハ以見地ハ以中
以見歌ハ以ハハ以見地ハ以中

天守乃二重目の柵と折劍——松九郎殿の
侍女ニシテ八重死常もハ松九郎殿大ニ誇り
少ハ免前和睡——と云ハ是も其也
大坂より新ニ名張河も出預入遠東も秋
高津山木倉典止ト入ル城甲又十一年
秀頼公の口為切リ是れ家子と和睡有
屋——と凍々々々浪殿うも又孝親と
海津の局を老ハ——是れと和睡也
天下の爲秀頼公ハ忠初方——と初ら
高次ハ去とも関東ハ中絶セ——去
云甲斐者——和睡ハ去ハ——と云レ

——と家元是田侯徳ハ最茶よう高小
心——高親も也於城始より——其方の
有り場不矢横官と閉城也も其也城也
不属——有る此時と前と敵も
和睡を初らもも之次も家元ハ是田
吳心を抱き城を銀を生——ハ於城
叶非く思ハ終り初滅也ハ十五の朝
城を破——三井寺ハ雲光院より高
法濟と金盃——又ハ和睡とハ——高
一——初ら大坂高方——ハ高次一人関東
ハ以味方——於城也——

神君も也 赤坂山居陣 一、我知
関原の戦は、一二月を待たぬ城を圍軍
こそ残多き事也とされ

神君も言次今日城をこそ入る人よ
今自の軍切並ふ者有御 是八道
一、と揚ふき者也と云く暗し也後
昔もさきと共志を懐く後より地山
石返さき若枝と云く今自和睡
とを以て西河原は天下一統後世
交りも難く陸道して西河原の
細細せし類も是方ゆく終は道終

城死すといへり又言次の昔は
赤坂の陣も大津の後詰せと
元之を思ふ

神君十官は赤坂の者共申す
是了居向ふと服揚り言知
斜に散漫合て此方近の長
の民家大を大津へ火を信法と
これと大津もは早和陸整へ
川道一ぬ家又岡嶋も多
是知赤坂長房は若祥坊
大津陣の事関東より

故奔者巧の石田二成も常々母送り
就一六富彦平。石田の家よか入して
其恩顧を蒙り一有今有之成り大垣
城より入りと少其軍勢の力を耐のん
思入送り大垣中より身取りあり二成
大に怪しむ面々相極くと昔人の物語
せ一石田澄りも一八女も定く若らん
三年以そ左衛門丹波界の初其方我方
一其方之夜食の相付せし時給仕の
小性酒の跳る我持来り知三成心せし
版権を乞一其方小性性之酒よりと

中我我心付く登りたり吾は
我辛息の挙動富彦いと思らんとし
汝の心付を恥し一實ハ其酒より我の切若
の口より叶大事を思ふ事已よ二年
引引屋外飲食の胃も心小性を以と
い小性性一多し其方若ハ其方叶大事
を思案一々神余事化念其方其方
其方一辛息も有一二年以氣の
恥辱を為辛息く信りんと其相先辛
汝方より其方之百もと以く冥求に其物
肩衝の辛入期々愛就して其時を道と

才子と仰ふ事迄も字々ゆかぬ也其國を改
け須知事ゆかりく入部け事少て彼若
若謀の宗店も有べきと彼を乞て招
くも——彼は借ひ忽ち來るを改百多て
子細せし言さハ此の如く果こそ謀め飽る
宗店好もこと宗人彼を倒ハす得るもこと
同は宗店彼を倒ハ名物の兼入り石炭
糸頭細事せしも——先頭大垣と海軍
某軍一中の及年よとありは石田殿中
さき——我方一人自の戦も請死せし
汝け兼入り——兼と之我止海と佐甚ま

若又軍勝利せば僕を倍——罵れしと
之も——某は救らむと救者乃道小川に
我も甚志と感——物ハ天下群衆よと
然り中屋——とそそ持帰り——世乃
名残り石田殿の運つを滅亡せしと某そ
遣之我志も——此け須知事兼を乞て
石田殿の亡靈も——と中——あるはハ
甚兼入り月と仰ふは是と——と仰ふ
宗店共克るとお勤い來り——こみいし
上候は目と有るはい——いのみいし
汝け兼入り兼來れ黄金の而も——

「う」ちておきよ〜 雑談もいふ事上道徳も
小西梅屋の切長八生傳もいふ事吉本
吳國八割は毎自熱練〜 意同その
者皆う梅屋も劉勇之奴の英傳もいふ事
道義もいふ事 徳討をせん必死少も此の
在へきこゝ難ん然らば死も後未信別
以傳留あり〜 叶へハ法程も道了満り
いへば故多又加多たらんは山子と合
り〜 へ〜 山子、叶へハ傳城還〜
い〜 徳〜 某の新上とさうと川流河ふ
世のゆたき〜 各ととら至某の愚云

中上も詳多くいふ事

内府公先多表明ハ法六と云〜 昔より
いふ事武切梅屋のいふ事 内府公と並〜 昔
者我輩といふ忠臣を也 人とさういふ中書
若始せ〜 といふ事 忠臣表明の切切は
あや〜 といふ事 不憎を類〜 といふ事 口説さう
某等といふ事 忠〜 といふ事 忠臣を後
甲曹始某不憎といふ事 忠臣を後 人々不憎は
いふ事 忠〜 といふ事 忠臣を切切は
いふ事 忠〜 といふ事 忠臣を切切は
あや〜 といふ事 忠〜 といふ事 忠臣を切切は

中道市れは忠吾報信も嘉明の原志を
大に感し少ひ子連りて赤坂のく降と
分らもききり候へり

神子若もけ也少くも甚く悦ぶ二層一しと三層候

小山より望むに代志の所はく山崎の赤名川具一井伊の所を
昔よりしては医例の場は初より少くは福徳里田よりは津川より
わらへり久松の陣政をせし思ふは後を政殿一話とて入ら
け候の如くはくせんは忠吾報信も嘉明の原志を大に感し
分らもききり候へり

昭坂小川 朽木 赤通 新く書す

昭坂中務少輔安治小川 古伝書 祐忠朽木
河内也 元徳承言利徳と名徳之ハ 今昔中納言の藤下
原一 杉尾山のと云 沖田のと云 定之の

今昔度已の因東内也せりとよと一 而もハ

我し初と方ときと小川と内城と敵

昔も其年も昭坂安治其父ハ大坂一

在りては 婦男信長も安元も軍勢けり

を陣興成の也休も是時より集りて

上方に遠征起り 道路塞てしものを以て

石田亦遠征の信使もも 無せり せり

朽木河内也 元徳無く

神子若も心とよと一 今昔上の道遠征

の一 味切り一 六是も力ぬく大坂の軍令

従ハ少少も向ハ 時志の程を月無く

関東よ告やあも小川七坊を祐忠石田と
うねみ有といふも今有之三の関東方
一柳監物重盛の姑丈城も八関東へとい
申統ねきは難儀とあはれ一墨山岩津
を少といふと一く飯堂佐治もまたより
我ハ、内府公を此少後白の初口歴從
了一減力能く大坂一前より知不足よ
石田三成始より小反逆を今も安藝備前
西大老回意有く西軍中因の大小名城
僅きもいれ小舟の寄し止事一城備を
一旦其れを急げといふといふ

内府公大徳大哉と名知を肯き不息
石田の逆後よ高橋仕へかや因て只今
石田陣を前り浮雲を因く晴天をん
思ひを明せり哀哉業後以急にを以て
吾丹心を口懐素有く志実作順の
あまを遂させ玉へといと頼もれぬ
言度も少しをよと一と夫より知む一
此等忠良軍切を抽は控へハ思慮
何んへ一けり言慮心切て中込へとい
有るは言慮より吾中老一たり
神君のは款々の内魚澤一糸練墨の

用事も多々あり。更に此の如き
一、水戸と法陣へ軍令書密に送
さる。又井伊直政を高より、其の以合
られ。——ことごとく、其の入直と
らる。直政も、先づ石田方へ、
入直とす。——石田の、
宇部多を治法將の方へ、
伺ふ。缺の挙動、
第一の軍制、
新

直政、
と攪か。大垣の内外を、
石田、頼切、
客方と、
——て、
城内、
又、
宇部多、石田、
関東、
心、
心、

流石——さき成へ——款未練の謀を那
勢くくもか——と率忽々仕うけぢは味方
元より皇軍の幸一に並んてお被へし
云中より作假の若傷く款陣へ——白旗
枚十流りある心——く

由有る陣と見へしと云は道支は合衆父
如へしといふも又

由有る代持るは海色軍をえり岸一航
内省着陣——控くハ銃乳——とく城巾
色ぬきと主きり字多中納まゆも免用
り冷や道もれ——我々の方より川西を

合——支も整軍ハ人数を添く款の虚実
と相が——といふも是は三成取地が
某々これ者とも世光の如く中巻——と
いへた道取くきくは款をハる事討死
自取を付へ——と云ふよう字多家よりハ
州石掃部東多精馬石四よりハ備生備中
崎た道中人と大將と——両家ハ人数
大極を押出——株原川を渡り種人——を
出——く刈田せ——むけ中村一学陣軍
近新がま月中村陣軍の若者片悟き
款の取ぬき——いしてや、流石——と

云程又竹田之部三束二間ハ胸ヲ爲ス色ノ棒ノ
尺ハ好シテ出出—段二三ノ実創以テ如ノ
砂地ノ玉龍成リテ部ニ由リ中色ハ昔從
馬ノウチテ死以テ是成リテ中村ノ陣
ノ家光體一色頼母敷内通ニ始我ノ
寓々也石田ノ岳ニ中體云次部信濃守
信濃林也物作敵ヲ毎ニ踏立百人ノ皇
字多ク方ハ唯名抄部也多ク騎馬橋本也
不破内通ニ始八百人ナリテテ今我
有馬皇孫以豊氏也中村ノ陣也中村
—ハ史故ハト云々也信濃守也

中崎ニ部定石體也其ノ馬本信濃部上回
甘平中物也其ノ信體也其ノ信體也其ノ
爲志先ノ多ク石田留ノ横人々也其ノ
高を有シテ大垣留也其ノ數之ハ中村
有馬苗家ノ留ハ左右ノ多ク也其ノ
中村留ハ馬成並ニ橋本川ニ入リ境
トテ二回ノ皇地烟ニテ其ノ流也其ノ
苗生備中ハ其ノ流ニ一色村ノ
林叢中ニ其ノ伏也其ノ其ノ其ノ其ノ
其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ
其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ其ノ

是をさうく始敷をせし大垣留も有るに
て常之を月の中村の留茶後の歌に詳敷
成公平茶を始若干清きさうり
其中の家光時一色形母八連糸の具是
古襖うけ合の三幣の指物烏毛の一重子の
馬巾と川東の押之栗毛の馬巾鞍袋小
三下りゆき味方裁創して居るなり
石田方海小市重なり古襖は中より馬下り
着く死若葉ゆき馬巾、中村の留茶、日利
備茶ハ糸具是より力裁せしり古茶多
方服尾を都たあるなり首と増る中村

新ハ梅津家重の糸此は外堀に意へ
採いし寢るゑん徒甚暢と左り死死も
者共八人中村留ハ趣敷茶と居る者馬
留の中より稲次右進を包む月の指物出
志免よを川を海一境の上へ着る石田方
今の別札の正名物して横山監物と
名系を合を裁いし縷は双方進く馬
着横山別力方へ右白と進敷知は稲次
家士走来く横山具是の綿噓とれく
川区一登は稲次別返横山とれて
押へ首とんと其附横山の家士又

之より、稲次、境の隈とれて、川倒さんと
とも、城に入、稲次、家士又横山の家士の後
より、切符、其方より稲次、横山の首討て
主より、横山の家士とも切て首をと、谷村時
田中兵部痛、勢も、強者多きは、中村、勢も
取て、返、一、益大垣勢と、挑戦、ハ、勝負、ハ、
又、ハ、分難、一、始、う、止、本陣、う、く、ハ、益、
ハ、横、を、く、以、後、一、く、い、酒、一、も、中、村
有馬、田、中、一、と、大、垣、勢、と、橋、原、川、の
境、の、上、う、く、祖、戦、う、火、花、を、お、破、て、ハ、
む、う、あ、く、ハ、返、一、汗、馬、東、西、は、此、邊、ハ、

種、徳、南、山、ハ、川、多、き、い、つ、果、一、し、も、あ、り、ま、
酒、も、も、多、く、作、り、ま、さ、し、の、勢、川、揚、う、と、
以、後、う、く、酒、を、畧、う、金、の、も、酒、の、さ、り、也、少、
宗、ハ、馬、を、有、馬、中、村、の、勢、の、中、ハ、入、入、
り、知、ま、し、い、つ、も、川、上、無、き、ま、ハ、井、伊、左、衛、
右、一、汝、ハ、娘、ハ、石、の、勢、川、揚、ん、事、難、
也、一、也、多、肉、紀、を、さ、り、作、ま、し、一、と、以、
て、是、ハ、也、也、畧、う、肉、紀、と、い、く、所、宗、と、是、
一、一、也、也、ハ、櫻、一、継、の、陣、羽、織、を、名、
今、の、堀、丸、の、小、馬、官、と、馬、の、侍、一、ハ、
宗、紀、也、未、だ、う、飲、味、方、ハ、酒、丸、を、中、一、

馬車に乗入り中村田中 有馬 三右衛門の人校
と川橋の物分も 川尻 一 奉勅詔も
味方も天晴の事と感せぬ者か、其の事
——とて今日白——あへの指あぬ人石田方
少く徳勝——と 神君もをくは流るそ
近江——川の白——廿八の夜をよくも
流るる——一人、林半助一人ハ 中野 彦太郎
く——とせん 天正統
泰業

業はよ承書出付井伊忠政も多し忠勝
あ人も味方の人数川橋と金せらる
そ耐忠勝忠政を歌く忠政、甲冑若

とて 写す忠勝を人 池川 人 数と川橋
——ハ 忠勝、傳る 須忠政、専ら 是より
あ人も 水攻の力とせらる——と 記は 今く
安政なり 大成記 家忠 記 中も 井伊
も多し あ人と 是 泰業、も 是 多し 水攻
徳川 記 因 承 記 大 全 本 より して 忠勝 一人
と 是 天 元 実 記 は 忠 政 と 是 多 内 記 忠 朝
と 是 安 民 記 も 是 後 承 書 付 人 記 也 也
是 多し 天 元 実 記 ハ 此 時 合 戦 也 也 川 尻 言
た 馬 助 物 語 一 冊 也 也 記 す 実 事 多 く
詳 悉 也 也 一 今 其 説 是 從 也

毛利秀元南宮山陣
今日榎瀬川合戦の最中、尾山口本陣に
集る。其陣に、平福、毛利、相吉、川、大軍
同、其分長若我部安国、若米、木村、等
を、忽、出、し、り、我、に、向、て、攻、め、り、し、き
と、云、物、は、味、方、の、軍、難、攻、め、ら、れ、し、き
と、注、射、甚、怪、し、き、也、其、時、中、多、中、將、左、衛、門、尉、
一人、に、改、め、ら、れ、し、き、也、心、を、方、
に、し、り、し、き、也、若、此、軍、我、を、持、敵、と、し、り、し、き、也、
先、利、を、攻、め、り、し、き、也、其、時、我、に、向、て、攻、め、り、し、き、也、

結句双方激闘の亂色を、
人、校、を、引、上、り、格、子、之、合、戦、を、好、む、故、に、及、
此、以、と、見、へ、し、り、し、き、也、其、の、軍、我、を、好、む、故、に、及、
此、と、し、り、し、き、也、其、の、陣、に、た、り、し、き、也、
備、後、を、し、り、し、き、也、其、の、合、戦、を、好、む、故、に、及、
此、と、し、り、し、き、也、其、の、中、に、多、中、將、左、衛、門、尉、
と、し、り、し、き、也、其、の、人、皆、忠、信、の、軍、旗、を、奉、
り、し、り、し、き、也、其、の、心、を、方、に、し、り、し、き、也、
理、の、故、に、其、の、毛利、秀、元、は、吉、川、將、左、衛、門、尉、
其、の、父、子、と、ち、が、み、有、り、し、き、也、其、の、大、坂、に、在、
り、し、き、也、其、の、時、我、に、向、て、攻、め、り、し、き、也、

と小山へ送り馬田甲斐守長政(書状)を以て輝元秀元心せし以て大坂の陣使に
通使といへとも全く相違はぬに孰く之
以て免を蒙り反忠をへしとの不承はしけり
能 内府公へ御通らさるべき一との
事切も付長政付時道市山守長政を
一と通家へ小川長政を使とて吉川、
書状を命じたるは長政を長政と
せしむる

長吉川及び書状具を彼へ送り
し候一しとて長政を以て輝元心せり

一公山守不審に候如く之に御知候
長吉川長政満是に付長政を御使
に御使かひに御遣へ

八月八日 家康

馬田甲斐守殿

初て甲斐守長政御陣の後も吉川慶家八
家士・蒲竹幸方を使とて輝元秀元
長吉川方より一と送りたりしに
徳永法平並初渡州へ島津の初吉川を
川内毛利を御使方とせんと申へ南宮長
大明神の御使方幸方を使とて

吉川へ移ると浪論——
八豆もせさり——八豆田へ内巻せし、
故郷の廣家、秀元を懐く流石の所にもよく
天三人へよく懸——関東へ津系——毛利
の廣家長久を討つひ輝元御の急難を
救はせのりく第一の功なりせん——津
家元、福永武敏、廣俊も云々とを——
津家は、田舎の故も、秀元とて送る程、津系を
動たう秀元されとも輝元への如く、
下津系振と月思ひもよく、津波や、尚ほ、
原も、長束安國とて名我外亦反忠

をへき志、下津波を裏切せとせん、
以外の不義、天下後世の嘲を免れ、
と云——吉川、福原、只、家の為、輝元、
此、為、中、也、は、秀、元、の、用、も、我、く、た、く、印、せ、ら、
る、——
粟、月、十、郎、三、郎、と、是、田、の、津、系、を、送、り、
は、ま、う、う、堀、尾、信、隆、の、忠、氏、も、故、々、り、吉、川、
己、よ、別、内、巻、せ、——
事、切、も、八、幡、原、川、の、
戦、を、金、平、の、足、く、上、へ、津、系、を、引、揚、
——
吉、川、の、故、郷、
三、浦、集、
昔、を、ら、る、は、毛利、の、家、土、の、記、た、書、と、評、せ、
ふ、

そりゆとすと証人等書より是ハ秀元
内色ノ事ハ始終知ルモさうし

傳明石陣 自 法陣 軍儀 等事

宇在々秀家と石田三厥及今ノ日榎瀬川
合戦後放也何所んとして大塚備前美若
の上ニ住ク甚傷余と討ツル業
頻居等々不（是業ヲ以テ秀家三厥も如陣一牛居村
逃那院門を以テ之ヲ安堵セ
二厥月前秀の色悪 傳明の合戦に元祖
三とらり又八天元 冥祀一 怪ハ 傳元追討石
掃部回達して陣取リ榎瀬川一戦の
始末とすたす時秀家

内府もは法陣 政さまと 権子一や
物ハは当地の合戦ハ何頃と存也と尋
らる 有人より是の者哉と云りて法陣の
権子と伺ハせり 内府もは昨日也 是頃
是陣取ルモ云々終りて陣取つた
先きの権子 内府様取の法陣元も法
一夜陣の取ル等々の権子合戦ハ唯の
斗雖もは南宮山の毛利宰相後松尾山の
合戦後也 是年古も也 是年若の事も云へば
各御出陣もは法陣取ルモ云々ハ此れ
此一戦ハくはれや 内府公より出陣ハ御

常々よ之威は只花巻とて放て酒を
おさひに馮大進側は有る多摩山成野
一とて思ふは此と古来より夜討
夜軍掃とては小智とて大軍、我
亦急は備員を争ふ時の事とて大軍
より小智の敵、夜討成をとり先例と
取らば、今宵八天、分目の大合戦、
六月、唯も平場、終一戦せん、
明日の戦味方は大軍敵は小智の鳥合
の奴京味方勝利は業の中神懸き
事、大進も久しとて

内府の押付を見たり、是はる程と
て、一城も其時大進、今やこころ
明日大勝利ハ服茶の事、とて、
西光切に大事とて、後、
古実、とて、能く、安心有らん、
ゆゑ、とて、云量久し、大進、
とて、横き、とて、大進、
何の頃、何の方、内府の押付とて、
ら、とて、同よ、大進、
故有、甲州武田佐々、山縣、
石を、山縣、

内府を掛川の城へ追込んと信井端よりして追ひし時云々

内府の押付を又争うと苦ふを時豊久亦あつて又及我城の者此きとて一押しを本とすとのよとい其其の

内府とあつた 内府を回復し心はわく大げさな事だへとい若其方中や相方の一戦もさう方 内府は押付と云ふは

の大率何事かけし有べき我亦又く合点と云ふはいと苦難して豊久は其府をきて降りしとて 天元

案をさして一陳大威記家忠日記の中にもいへば城を不吉なりと文に記すは天元宝記儀書左馬物目撃せし物活洋事なりといふなり一任の関系合戦迄は良大田少兵衛の流石なり

秀家之威亦大垣外関系に事

九月十日黄昏より及く赤坂若山に中津出ては福徳正則池田輝政細川忠興京極言知清隆幸長黒田長政堀尾忠氏加藤元明後輩之虎田中吉政山内一豊織田有樂有馬法正合戦法正の家に入り及井伊

虫改也多造俗酒井家次也多正統小宗流
歴々八輩烟催一軍法を激一改戦
の利害を占候一々々名一回々々
々々当北へ出陣者一々々一軍中
将率勇氣見頃一十倍せり此智も亦一
明八面一人敵を押出一太垣の城を一時
一攻丸一々々一々々

神君少右大垣も及宇表多治大督揃死り
是る事其も及味方別要攻るとも急小
攻落一々々一々々一敵を平場一川出一々
中一丸一何討丸一内一守丸一々々一守丸

一々一廿月一討陣一せ一々一太垣一々一と
おさぬハ此方より攻ふ戦術と云へたる御ハ
此方陣一を移一々急ら一々竹中丹波
一々願著提一陣整を一々一とめ置せり
井伊虫改而り此の如く岩本山菩提院の城
是を一々一守一々一被北一々一守陣一移され
御一々一著提一此下より一兵隊一閑道推更
の急小知一高何もしも切所一と一は其
一見表方一守とをら一々一き一々一やと
一々一神君收兵一七路一其方
弓矢の嗜思一々一何の守一々一御ハ

へは此帳に留意有ん様其元少きん
りも御へといは吉川廣家安中
とこと白服有きといは東家よは中書
中書紙の世我位也らうとも貴僧を
尚家持ぬを三下をらうとも前目の
月をひく宰相城守善長の徳下の如く
ふも心を更させよといは道順曲も
不存といふと苦く安んずをらうとも
安んずは返れへき調ゆかきもとい
己陣新し佛り善長何と申す元
吉川も関東へ内也有くの事と心付

一也(聖十哲の一職)も長友安国
長友我師毛利勢の衰切我親是(終日
其用心)もさうも関ヶ原の一戦ハ終
り妖魂石田三成付利して雨は土煙を
雨道を求尋子(津村)より田中八
道哉へく吉村南宮山より毛利の
陣へ入る種く巧ん我臣一秀元哉
諒(とも)も吉川さうも(元合氏)三成
御(ハ)字(善)多(後)と(大)若(我)未(也)と(先)陣(と
勤)へ(一)宰相(後)入(り)月(後)陣(を)押(さ)へ(と
中(在)牧(田)道(下)り(松)尾(山)よ(り)平(景)元(見



愛 知 県



1103264731